

円光大師とその時代

中央仏教学院講師 星野元貞



3月7日は円光大師会です。円光大師は法然聖人の諡号です。そこで本稿ではこれにちなみ法然聖人とその時代のことなど窺ってみましょう。

法然聖人は長承2年(1133)に誕生、建暦2年(1212)80歳で亡くなりました。それはまさに末法の時代でした。

末法とは仏法の歴史観で、釈尊が入滅して1000年間は正法とって、仏教の教えとそれを実践する行と、その結果である証(さとりの)の三つが正しく保たれている時代。次の1000年は像法で、教と行は保たれるが、証が得られない時代。そして末法の世になると、教だけが残り、証は得られず、世の中は戦乱や、天災地変が絶えないというものです。

そして末法第一年は、平安時代後期の永承7年(1052)と考えられました。実際にこの時代は貴族の摂関政治に代わって武士が台頭し、社会は混乱して、天災地変も大変なものでした。たとえば鴨長明の『方丈記』は安元3年(1177)の大火は、都の三分の一が焼失し、多数の罹災者を出したことを記し、また養和の飢饉は、「築地のつら、路頭に飢ゑ死ぬる類は数も知らず」という惨状で、さまざま祈禱も効験がなかったと観察しています。元暦2年(1185)には大地震もありました。寿永2年(1183)9月、平氏を追って入京した木曾義仲の軍の悪行も深刻でした(『玉葉』)。こうした末法濁乱の時代相は、下層庶民にとってより一層の過重の苦しみでした。

法然聖人は、こうした末法時代に生きる人びとが救われる道を懸命に模索されました。その結果、承安5年(1175)に43歳の法然聖人は、唐の善導大師の、「一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆゑなり」(『観経疏』『註釈版聖典七祖篇』463頁)の一節に導かれて、専修念仏に帰入されました。つまり釈尊の教だけが残り、それを実践することもできず、証も得られない時代の人びとは、ただ阿弥陀仏にすべてを委ねるお念仏の道しかありませんでした。

ひるがえって現代も悲惨なイラク戦争など、鬨争堅固の末法の最中です。このような時代に生きる私たちは、仏教の精神に反する戦争を厭うとともに、ただお念仏しか救われる道のないことを今一度喚起いたしましょう。

(前龍谷大学助教授：真宗史担当)